

## 第1号議案 名誉会員の推薦（案）

長年にわたり、助産業務に功績があり日本助産師会の活動に貢献された次の4名を名誉会員として推薦したい。

### 1 佐藤 ムツ（89歳）岩手県

昭和24年より現在に至るまで、70年にわたり助産ならびに母子保健活動を行った。特に昭和61年以降は、助産所を開設し、地域に根ざした母子保健活動を積極的に実施した。

昭和61年に社団法人日本助産師会岩手県支部理事となり、平成11年から平成17年、平成19年から平成22年まで、延べ9年間にわたり社団法人日本助産師会岩手県支部長を務め、平成24年より一般社団法人岩手県助産師会顧問となり現在に至る。助産師研修に多数出席して知識・技術の研鑽に勤め、支部長や顧問として、助産師会の発展並びに後進の指導に貢献した。

平成14年に岩手県支部で子育て女性健康支援センター事業開始にあたっては、盛岡市やもりおか女性センターとの連携協力にも尽力した。

助産師活動の功績により平成8年に社団法人日本助産師会会長表彰を受け、地域における地道な母子保健活動が認められ、平成9年に母子愛育会会長表彰、平成13年に岩手県知事表彰、平成16年に厚生労働大臣表彰、平成26年に旭日双光章等、多数の表彰を受けている。

### 2 白井 ハツ（81歳）茨城県

42年間に渡り助産師として活動し、母子とその家族への健康支援に対し、並々ならぬ熱意をもって業務にあたっている。また、地域のリーダー的存在として先進的な考えを持ち、後輩助産師を牽引しており信頼も厚い。さらに、時代のニーズに応じるために日ごろより積極的に研修会等に参加し、専門知識をブラッシュアップする姿勢は尊敬に値する。

白井氏が助産院を開業した時代は、病院での分娩が主流となっていた。助産院や自宅での分娩においては、自然分娩を成し遂げることが目標である。そのため、妊婦が順調な妊娠経過を辿ることができるよう、妊婦のセルフケア能力を高める支援、分娩に向けた身体づくりを大事にするケアを行いながら女性の持っている力を引き出し、その人らしい分娩を目指した。白井氏が現在までに介助した分娩件数は2000件を超える。

育児期の母親に対しては、分娩直後から継続的に母乳育児支援を行ってきた。白井氏が助産院を開業し、地域に根ざした母乳育児支援者がいるということは、母親にとっては大変心強いことである。そのほか早くから行政と連携し新生児訪問の門戸を開いた。白井氏は時代を読み先見の明を持ち、今なお母子の健康支援への貢献へ尽力している。その情熱を受け継ぎ、現在、同じ地域で後輩助産師が白井氏の指導を仰ぎながら新生児訪問を継続している。

さらに白井氏は育児中の母親の孤立を防ぐため気軽にサポートを得られるよう平成 27 年 12 月から母親たちの集いの場を作った。また、平成 29 年 11 月から守谷市との産後ケアの事業委託である産後ケアを提供している。平成 30 年 11 月に廃業届を出したが、後輩へと助産院を継承・指導しながら助産業務にあたっている。

助産師仲間はもとより地域の女性・母親からの信頼が厚い。長年に渡る助産業務の継続のみならず、新規事業を立ち上げるバイタリティを持ち、廃業届を出した後にも、後輩助産師育成に熱心に取り組んでいる。

### 3 毛利 種子 (91 歳) 兵庫県

京都大学病院、京都国立病院での臨床を経たあと、昭和 34 年に神戸市内で毛利助産所を最初は出張形態で開設し、昭和 49 年より有床助産所となる。平成 7 年の阪神淡路大震災にて助産所が全壊するも、地域住民のつよい再建要望や全国の助産師たちからの応援に応え、1 年 9 ヶ月後に助産所を再建した。助産所再建までの 1 年半は、自宅分娩に切り替え 45 名余のケアに奔走した。命が与えられたと震災後は、より多くの後輩育成のために開かれた助産所を再建した。妊婦管理、分娩管理、産褥管理、地域の母乳育児支援、保健指導を通して長きにわたり母子保健に貢献してきた。助産所開設後 2600 名余りの分娩にかかわる。平成 19 年度より娘に助産所を継承し、88 歳まで臨床で助産師活動をつづけた。

また助産学生、病院勤務助産師、JICA 海外研修生の学ぶ場を提供してきた。母乳育児支援については、痛みを伴わないマッサージが評判となり、兵庫県助産師会、全国助産師教育協議会、助産教育機関などの講師を務めた。また院内助産開設や診療所開設、助産所開設前の研修も多数受け入れてきた。

全国助産師教育協議会、兵庫県助産師会などの講師としても活躍している。助産師学生はもちろん現任教育としても多数の研修生を引き受けており、後輩の育成に於ける貢献は甚大である。

職能団体の活動としては、神戸市東灘区助産師会の会長、兵庫県助産師会役員（区会長として）を務める。

終始一貫母子保健に貢献された方であり、多くの方からの信望厚く、多くの女性や助産師たちから感謝をよせられる方です。

#### 4 <sup>きよだ</sup> <sup>えいこ</sup> 許田 英子（84歳）沖縄県

##### <施設・母子保健行政での業績>

昭和32年3月に琉球政府立コザ看護学校を卒業し、看護職者としてスタートする。その後、高知県で保健師、米国ニューメキシコで助産師の資格を取得。昭和47年本土復帰に伴い沖縄県の看護師、保健師、助産師、養護教諭、看護学校教員・学校長、看護行政副参事として臨床・教育・行政の場で活躍する。看護教員の資質向上、看護師等学校養成所の充実強化、民間病院における管理者育成、助産師職能団体の育成、特に母子保健行政・母子保健事業の向上発展に多大な貢献をした。平成8年3月沖縄県環境保健部参事監を最後に38年間の公務員生活を終える。

##### <看護教育者としての業績>

看護学校在職27年間、母子保健領域の教師として助産師、保健師、看護師の教育に携わり、人材育成に貢献した。中でも、戦後10年間中断していた助産師教育の再開に米国で学んだ知識を生かし、沖縄における新制度による助産師養成の基礎を築いた業績は大きい。

また、平成18年県立看護大学に助産学科設置を求める要請活動を中心となり牽引し、平成20年4月に県立看護大学別科助産専攻の第1回生20名の入学を実現した。当専攻科は平成29年度までに180名の卒業生を送り出し県内の助産師不足解消に果たした功績は甚大である。

##### <沖縄県助産師会における貢献>

平成元年7月、社団法人日本助産師会沖縄県支部の設立に理事として奔走する。平成3年に副支部長、平成8年に支部長として11年間、組織強化、助産師の技術向上と専門性を高めるために教育研修を企画・運営し、後輩の育成に尽力した。

平成23年には本会の一般社団法人化に向けリーダーシップを発揮され、平成25年に開設した沖縄県助産師会母子未来センターの建設には物心両面から多大な貢献をした。現在も顧問として数々の助言・示唆を与えている。